

ヴァヌアツだより

「ヴァヌアツだより」は、高野 元美 隊員(平成7年度2次隊/ヴァヌアツ/幼稚園教諭・現職参加)が、勤務先の保育園関係者や園児の父兄宛てに、活動の様子をわかりやすく報告し、大好評を得たB4版のレポートです。1995年12月から1998年3月まで、活動中に手書き版25号、帰国後に続編15号、合わせて40号が発行されました。

今回、高野さんの快諾を得て、この「ヴァヌアツだより」全号をご紹介させていただくことになりました。現地での生活や、活動の様子が生き生きと描かれているだけでなく、2年間苦楽を共にした愛犬ナツとの悲しい別れは、胸に迫るものがあります。ぜひご感想をお寄せください。



From Vanuatu

ヴァヌアツ だより

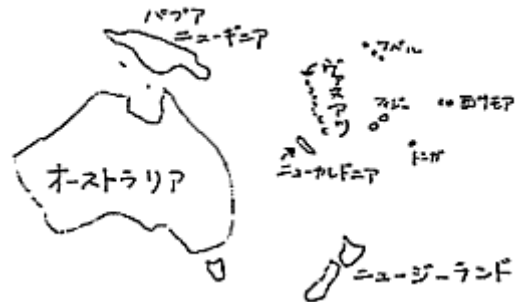
— みなみのしまより —

青年海外協力隊員
高野 元美

No.1

☀️ 一宮保育園の皆さん、お元気ですか。私は12月10日にヴァヌアツに到着し、現在、首都ポートヴィラでビスラマ語を勉強しています。(1月上旬まで)

☀️ ヴァヌアツは、南太平洋にうかぶ約80の島々から成る人口16万人の国です。イギリス・フランスの共同統治から、1980年に独立しました。公用語は、英語・フランス語で、日常生活ではビスラマ語を話しています。その昔は、1つの国を形成していたわけではなくて、それぞれの島で、それぞれの暮らしをしており、独自の言葉(ランゲツジ)が話されていました。現在でも、島々で、ビスラマ語とランゲツジが併用されています。



☀️ 首都ポートヴィラの暮らし

街には、リゾートホテルが建ち、スーパーマーケットはもちろん、色々なお店、レストランが並び、何でも手に入ります。ヴァヌアツでとれる果物・野菜など以外は、全て輸入しているので、物価は、日本と同じか、それ以上です。ティッシュは1箱300バツ(300円ぐらい)してしまいます。それでは、ヴァヌアツの人々は所得が高いのかというと、そうではなく、仕事をもち、安定した現金収入があるのは、ほんの一部の人々のみです。タロ・ヤムといった芋や、果物は、植えておけば、自然に実るので、あまり働かなくても、十分食べていけるんですね。

首都には何でもあって、街はきれいで、水道の水だって、飲めてしまいます。治安も日本よりいいのではないかとされています。でも、車で5分も走ると、トタンをつぎ合わせた家に住み、電気のない生活をしている村があるんですね。この格差がものすごいです。まるで、時代が50年か100年ぐらい違うのではないかという感じです。

今回は国の紹介と首都について書いたもので、少し堅い内容になってしまいました。次回は、真夏のクリスマスについてレポートします。

(1995.12)



目からウロコ!! 異文化体験

2~3才の小さい子どもは、どうもパンツをはいていないらしい...

その方が確かに涼しそうである。

でも、クリスマスのお出かけのときだけパンツをはいていた。

大きい子どものことはよくわからない。

(今後、詳しくわかれば、また報告します。)



From Vanuatu

ヴァヌアツ だより

— みなみのしまより —

青年海外協力隊員
高野 元美

No.2

☀ 真夏のクリスマス

クリスマスといえば、雪の中、サンタがそりをひいて — というイメージですが、ここヴァヌアツでは、真夏のクリスマスです。

それでも、クリスマスの飾りは、雪の中を走るそりや、厚い服を着たサンタと、これは世界共通のようです。こちらでは、サンタのことをファーザー・クリスマスとよびます。多くの人がキリスト教を信仰しているので、クリスマスは、大きなイベントです。

私は、ホームステイ中に、クリスマスを迎えました。

24日には、午前中、教会に連れて行ってもらいました。海が見える丘の上であり、涼しい風が吹き抜け、気分は最高でした。日頃は質素な服を着ていますが、教会に行くときは、みんなおしゃれをします。

女性は、アイランドドレス(レースのついた花柄のワンピース)を着て、とても華やかです。

クリスマスには、親戚一同集まって、お祝いするようです。私のステイ先は、ロブスターとタロイモを持って、パパの兄弟の家に行き、お食事会となりました。

まずお昼を食べて、その後、いったん家に帰って昼寝をし、夜また出かけて行き、夕食を一緒に食べました。ヴァヌアツの人々にとって、お昼寝は欠かせません。一家全員でよく寝ます。暑いので、疲れてしまうのでしょうか、きっと。 私もよく寝ています...

私がステイしていた家は、ヴァヌアツでは上流の家庭です。3才になる男の子がいたのですが、両親は、彼には英語で話しかけるようにしていました。大人同士は、ビスラマ語で話しているのですが。

理由は、ヴァヌアツでは、小学校に入ると、授業が全て英語またはフランス語で行われる為、今から、英語に慣れておいた方が、いいだろうということです。 こうやって、彼らは自然にバイリンガルになっていくわけですね。

私はまだ十分ビスラマ語が話せませんが、子どもとは、わかり合えるという感じですね。言葉の壁はないですね、子どもとは。うれしそうな時、すねてる時、眠そうな時、いつでも、彼の表情を見れば、どういう気持ちなのか、よくわかります。そのあたりは、日本の子どもと同じですね。

子どもっていいなあとしみじみ思いました。

次回からは、ペンテコスト島のことをレポートできると思います。



目からウロコ!! 異文化体験

子どもが、自転車(補助輪つき)やスケーター
を家の中でのっている。

外でのった様子は全くなく、とてもきれい。
暑いからなのか、高級品だから大事にしている
のか、よくわからないけれど、
どうも納得がいかない私です。

- ☀ 水は、ウォータータンクにたまった雨水を使います。
- ☀ トイレは、外にあります。地面を掘って、板をわたしてある。
- ☀ 電気はありません。夜は、灯油のランプをともします。
- ☀ バケツに水をくみ、コップで体にかけて、**水あび**をします。水あび用の小屋があります。バケツ一杯でシャンプーもできますよ。

(1996.1)



From Vanuatu

ヴァヌアツ だより

— みなみのしまより —

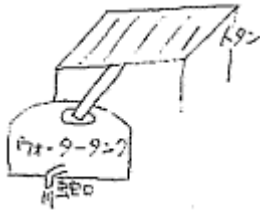
青年海外協力隊員
高野 元美

No.4

☀️ ラニ！ (こんにちはという意味)

今回は、暮らしのライフライン、水と電気 ←ないけど… についてです。

☀️ 水



ペンテコスト島北部は、川がないため、ウォータータンクにたまった雨水が唯一の水です。そのため、水は貴重です。雨期(11~4月)はけっこう雨が降るのですが、ウォータータンクが少ないため、ためおくことができないのです。

←このように、トタンに降った雨水を集めています。

私が一日に使う水は、飲み水にバケツ半分、洗たくにバケツ1杯ちょっと、水あびにバケツ1杯といったところでしょうか。

村の人は、この水をそのまま飲んでいきます ←大丈夫なんですね、彼らは。 が、私は沸かしてから飲んでいきます。

水あびは、バケツ1杯ですませます。シャンプーをして石けんで体を洗ってますが、これだけ泡だらけになって洗っているのは、私ぐらいでしょう。村の人は、水をあびるだけのようです。海の近くに住んでいる人やこの辺りでも水が少なくなってくると、海で水あびをします。海水は日本よりは、サラツとしています。私はやはり、真水をあびないと、さっぱりできません。海に泳ぎに行き、帰って来て、また水あびをしている私は、きっと村の人から見ると、ヘンでしょうね。(ちなみに海はものすごく美しいです。サンゴ礁にお魚いっぱいです。)

☀️ ランプの生活

電気がない生活はどんなものだろうかと思っていましたが、特に何の問題もなく、すんなり受け入れられました。夜は、灯油のランプをとめます。もちろん、電気のような明るさはありませんが、これで十分です。冷蔵庫もなければ、全然必要は感じません。文明とは、所詮、なければならぬ、どうにでもなるものなのかもしれません。



写真では見たことがあったけど、ホントに見たときは感動しました!!

(1996.1)



From Vanuatu

ヴァヌアツ だより

— みなみのしまより —

青年海外協力隊員
高野 元美

No.5

☀ ラニ！ (こんにちは)

ヴァヌアツ・ペンテコスト島での生活も、3週間がすぎました。今回は、食べものについてレポートします。

食事は一日3回。これは日本と同じです。主食は、タロ・ヤム・クマラ・マニオックといったイモで、おかずに、アイランドキャベツをココナツミルクで煮たもの、これが毎日のメニューです。私も毎日食べています。ご飯もたまにでます。バナナもよく食べます。(日本のバナナとは違う種類で、ゆでて食べるのです。)

お客さんが来るときや、村の祭りのときは、ラップラップを作ります。これはイモまたはバナナをすりおろし、ココナツミルクをまぜて、バナナの葉でつつみ、たき火の中に入れ、その上に石をおいて、蒸し焼きにするものです。肉やアイランドキャベツを入れることもあります。

☀ ナカマル

村には、ナカマルという公共の家があります。

男性が、チーフに会って、夜はカヴァ(コショウの木の根からつくる飲み物)を飲む場所です。男性と女性のためのスペースが分かれているところもあります。ここで料理したり、女性はカゴを編んだりしています。ここに来れば、誰かに会えるという場所です。

私も毎日ナカマルで食事をとっています。

☀ カヴァ

コショウの木の根をつぶして作る、アルコールではないのですが、お酒のような飲み物です。村では、チーフの許しをもらって、ココナツのカップに入れて、ナカマルで飲みます。

飲み方は、外に出て、人に背を向け陰の方でこっそり一気に飲みほします。味は泥水よりまずいと言われるぐらいで、煎じ薬のようです。飲むと、ボーッとして、動きがゆっくりになり、自分だけの世界にひたれるのだそうです。つばがすぐ出るようで、よくペッペッと吐いています。女性が飲むことはタブーとされていましたが、近頃は、女性も飲んでもいいようになってきたそうです。

若い人は、ビールやウイスキーなど飲む人も増えてきているようです、特に首都では。でも、島では毎晩カヴァを飲んでいきます。

(1996.1)



From Vanuatu

ヴァヌアツ だより

— みなみのしまより —

青年海外協力隊員
高野 元美

No.6

☀️ **ラニ!** (こんにちは) お元気ですか。
私はやさしい村の人々に囲まれて、おだやかな毎日を送っています。

☀️ 村の暮らし

村の朝は、早いです。夜明けとともに起き、水あびをしたり、洗たく、そうじ、草刈り、ガーデン(畑)へ作物を取りに行ったりと、よく働いています。ヴァヌアツ人は、あまり働かないだろうという先入観がありました。確かにのんびりペースではありますが、自分たちが生活していくために必要なことは、しっかりやっています。ガーデンに作物を育て、庭にニワトリ・ブタを飼い、必要なものは、あるもので工夫して作るという、自給自足の生活です。お金を使うのは、灯油や缶詰をたまに買うときぐらいでしょうか。実際、現金収入はほとんどないので、お金を持っていないのも現実ですが、貨幣経済が少しずつ彼らの生活の中に入ってきているのが現状です。(良い悪いは別にして)

☀️ 村では、結婚式をはじめとし、色々なカスタム(伝統的な行事)があります。そのときは、村人総出で、カスタムに参加します。カスタムについては、後日詳しくレポートしたいと思います。

☀️ 村の人は、大人も子どもも実にたくましいです。何でも自分たちでやってしまいます。もちろん、ニワトリをさばくことは、誰でもできます。ブタだってウシだって、自分たちでさばきます。私も、先日、ブタを殺すところを見ました。この話を聞いて、皆さんはどう感じましたか。(動物が)かわいそうだと思いませんか。(村の人が)野蛮だと思いませんか。でも、私たちは肉を食べているのです。スーパーでパック詰の肉しか買えない私たちは、それが命であることを意識できにくいですね。私は今、豊かな自然の中で、たくさんの生命に囲まれて自分たちの力で生きている彼らが素晴らしく思えます。そして、うらやましくも思います。生きる力にあふれています。

☀️ ペンテコスト島に来て、村の人から、自然から、たくさんのことを教えられています。これから1年11ヶ月、色々なことがあると思いますが、今は、こんな素晴らしい所で暮らせて、幸せだと感じています。



From Vanuatu

ヴァヌアツ だより

— みなみのしまより —

青年海外協力隊員
高野 元美

No.7

☀️ **ラニ!** (こんにちは) 村を歩いていると、「ラニ!」「ラニ!」と声をかけてくれます。村の人は恥ずかしがり屋の人が多く、始めは、私が「ラニ!」と言っても、特に子どもなど照れてうつむいてしまっていました。最近は、だいぶ慣れて来たようで、ちゃんとあいさつしてくれます。

☀️ 村の人と私

ヴァヌアツの人は気性はおだやかで、優しく、とても人がいいようです。この辺りに日本人が住むことが初めてということもあって、私のやることなすこと、みんなが注目しています。私の行動は、一夜にして村中の人の知るところとなっているわけです。私が誰かと話していると、いつの間にか、子どもが20人ぐらい集まってきていることがよくあります。

私の髪、肌の色、服装、持ちもの、全てがめずらしいのです。小さい子どもには、こわがられて、泣かれてしまうことが多いのが残念です。「ホワイトマン(ここでは私も白人なのです)を見るの、初めてだから」と、お母さんが、申し訳なさそうに笑います。

☀️ 村の人は、ペンテコスト島北部の独特の言葉(ランゲツジ)で話しています。ピスラマ語でも、コミュニケーションをとれますが、村の人の中に本当に入っていきたいので、ランゲツジを話せるようになりたいと思っています。もちろん辞書も教科書もありませんから、メモを片手に聞き取っていくしかありません。チンプンカンプンであきらめかけていましたが、今、また頑張っています。こんな気持ちになったのも、村の人のあったかさのおかげです。

(1996.1)



From Vanuatu

ヴァヌアツ だより

— みなみのしまより —

青年海外協力隊員
高野 元美

No.8

☀️ **ラニ!** (こんにちは) ヴァヌアツでは、12・1月のホリディが終わり、2月から新年度がスタートしました。キンディー(幼稚園)も2/12から始まっています。

☀️ ヴァヌアツの教育制度

小学校の6年間は義務教育となっており、卒業時に全国统一テストがあり、合格するとセカンダリースクール(4年間)へと進めます。

数年前、小学校に入るためには、キンディーに行っていなければならないと国で決まったそうです。しかし、国は、幼児教育には、全く力を入れておらず、キンディーの経営は、村にまかされています。そのため、資金が乏しく、設備も保育材料も十分ではないのが現状です。

私のいるペンテコスト島北部のキンディーでは、1人当たり3ヵ月で1000バツ(約1000円)の保育料を集めていて、収入はこれのみ。この中から先生の給料も出るので。しかも、全員が払えるというわけではなく、なかには払えない家庭もあります。

ヴァヌアツには、幼児教育を学べる場はないので、キンディーの先生も、特にトレーニングを受けたわけでもなく、ふつうの村のお姉さん、おばちゃんがやっています。

現在、民間の援助団体(NGO)であるアーリー・チャイルドフッド・エデュケーションが、キンディーの先生を対象にワークショップ(講習会)を開いていて、先生達にとって唯一の学ぶ場となっています。

☀️ ペンテコスト島北部には、15のキンディーがあります。まずは、歩いていける範囲のキンディーで、先生をサポートしながらいっしょに働き、何が必要なのか、私は何をすればいいのか見つけていきたいと思っています。

(1996.2)



From Vanuatu

ヴァヌアツ だより

— みなみのしまより —

青年海外協力隊員
高野 元美

No.9

☀️ ラニ！（こんにちは！）

私は、今、家から徒歩3分のロルタボラ・キンディーに行っています。
園舎は、ブロック造り、広さは、ちょうど、いちごぐみさんぐらいでしょうか。おもちゃは木切れをブロックにしているぐらいです。あとタイヤが5コあります。

キンディーの一日

A	7:30	出勤
M		登園 ←子どもだけで来る子どもと、親と来る子どもと半々ぐらいです
	8:30	お祈り・出席をとる カスタムストーリーを話す
	9:30	自由あそび
	10:00	おやつ ←家から芋などをカゴに入れて持って来ています リズムあそびなど
	11:00	お祈り
		ランチ ←ランチのときは、床にバナナの葉をしいて、そこにみんなの 食べものを並べて、分け合って食べます。
	11:30 すぎ	降園 ←子どもだけで帰ります。

小学生も、芋の入ったカゴを肩から下げて通学しています。本も文房具も何も持ってなくても、みんなカゴだけはしっかり持って、30分・1時間と歩いて来ます。葉っぱを暑いときは帽子に、雨のときはカサにして、かわいいですヨ。

☀️ 子どもは20人弱いますが、毎日来るのは、半分～2/3ぐらいでしょうか。年齢は大体3～5才です。（ヴァヌアツの人は、年齢がわからない人も多いのです。）

先生は、セラという、8年ぐらい経験のある30才すぎの女性です。日本のように、先生が子どもとあそぶということは全くなく、スケジュール通りに子どもを集めて、前に立って、話をしたり、歌ったりするのが“先生”というものになっています。子どもは、先生の言うことをよく聞いて、おとなしいという印象を受けます。子どもが毎日来ないというのは、ヴァヌアツ人の気質もあると思いますが、子どもにとってキンディーが毎日行きたいほど楽しいところではないのかもしれないかもしれません。（おとなしすぎます。子どもならもっとにぎやかでなくてはねっ）

まず、明日も来たいなと思ってもらえるキンディーにしなければと、今、考えています。
私が子どもとあそぶ姿を見て、セラ先生が何か感じ取っていつてくれればと思います。
。とりあえずは、ヴァヌアツの保育を知り、受け入れていきたいので、見守っていきたいと思っています。

(1996.2)



From Vanuatu

ヴァヌアツ だより

— みなみのしまより —

青年海外協力隊員
高野 元美

No.10

☀️ **ラニ!** (こんにちは!) 一宮保育園の皆さま、ご入園、ご進級おめでとうございます。子どもたちも期待に胸をふくらませて、元気に通園していることと思います。

さて、新たに入園された皆さまに、少し自己紹介をさせていただきます。私は一宮保育園を5年半過ごした後、昨年12月より、高知市からの派遣という形で青年海外協力隊員として、南太平洋、ヴァヌアツのペンテコスト島という所に赴任しています。ヴァヌアツと日本の交流の橋わたしができればと、こうしておたよりに書いているという次第です。

☀️ 夕暮れ、一人で浜辺を散歩していると、どこからともなく子どもたちがやって来て、ニコニコしながら、ゾロゾロついてきて、せっかくのたそがれの雰囲気も台無し... ワイワイ、ガヤガヤとなってしまいます。道を歩いても、すぐ見つけられて、「来た来たー」とばかりに子どもが飛び出してきました。村に入ると、あっという間に大勢の子どもたちに取り囲まれてしまいます。どこに行っても、子ども、子ども...。そうなのです。ここは子どもが多いのです。

☀️ 日本のような壺型ではなく、正しいすそ広がり的人口ピラミッドを形成しているというわけです。50年前までの日本と同じですね。はっきりした統計はわかりませんが、大体5~8人程度、兄弟姉妹がいるようです。

子どもたちはいつも元気いっぱい、ハダシで走り回っています。もちろん既製のおもちゃは全く持っていませんが、豊かな自然の中で、自分たちであそびを見つけ、歓声をあげています。兄弟姉妹ではもちろんのこと、そうでなくても、年上の子どもが年下の子どもの面倒をよくみて、年下の子どもは、お兄ちゃん、お姉ちゃんの言うことをよく聞いて、あそんでいます。

☀️ キンディー(幼稚園)で子どもを見ていて思うことは、泣かない、ケンかが少ない、すぐ立ち直る(気分を切り替える)ということです。そのあたりは、大人が仲立ちにならなくても、子ども同士ですぐ解決し、自分で気持ちを切り替えていけて、実に素直でたくましいです。

日々の自然な子ども同士の関わりの中で、相手のことを思いやるやさしさ、自分の気持ちをコントロールする強さを身に付けていける環境が、ここにあります。



目からウロコ!! 異文化体験

パンツについて、その後…

以前、No. 1で、男の子はパンツをはいていないと、レポートしましたが、覚えていますか？

えー その後、調査(?)を重ねた結果、男の子は、大きい子も小さい子もパンツは全くはいていません。(多分大人も)

女の子は、はいている子とはいていない子と、半々といったところでしょうか。

スカートの下に半ズボンをはいていたりします。大人の女性ははいていると思います、多分。